

まえがき……………1

第一章 良名仮名遣Ⅰ — その概念の発見 —

第一節 いろは歌と物部良名の世界(上)……………11

第二節 いろは歌と物部良名の世界(下)……………25

第三節 源氏物語から見た良名仮名遣……………42

第四節 枕草子の難語「ゑぬたき」について……………56

第二章 良名仮名遣Ⅱ — その発達の実態 —

第一節 良名仮名遣とは何か……………75

第二節 良名仮名遣の第一規則……………82

第三節 良名仮名遣の第二規則……………98

第四節 良名仮名遣の第三規則……………125

第三章 いろは歌の言語遊戯 — その重層的構造 —

第一節 いろは歌の言語遊戯とは何か……………151

第二節 平安後期のいろは歌による言語遊戯……………155

第三節 平安前期のいろは歌による言語遊戯……………186

第四節 無撥音の原初いろは歌による言語遊戯……………205

付録 身辺雑記

第一節 自費出版『いろは歌の謎を解く 物部良名の言語遊戯』……………237

第二節 休日の過ごし方……………239

第三節 五十歳の近況報告……………245

第四節 湯川秀樹と朝永振一郎……………250

仕事一覧(左開き)

人文科学の仕事……………(5)

著書

論文	(8)
自然科学の仕事	
著書	
ファースト・オーサーの論文	
共同研究者が発表した共著論文	
講演要旨	
発明考案	
その他の仕事	(31)
座談会	
寄稿文	
受賞歴	(32)

第一章 良名仮名遣Ⅰ — その概念の発見 —

日本語史に名を残す仮名遣として、上代特殊仮名遣^①、平安かなづかい^②、定家仮名遣^③、契沖^{ちゅう}の歴史的仮名遣^④、現代仮名遣の五つがある。これから述べる良名仮名遣^⑤は、それらに準ずる仮名遣として、昨年その存在が明らかにされた。

良名仮名遣とは、古今集歌人・物部良名^{ものべのよしな}が作った言語遊戯——いろは歌と『古今和歌集』955番歌から成る言語遊戯^⑥に窺われる音韻認識である。上代特殊仮名遣が上代人の音韻認識であり、平安かなづかいが王朝人の習慣であり、藤原定家^{ふじわらのさだいえ}と契沖の仮名遣がいろは四十七文字を使い分ける際の決め事であり、現代仮名遣が現代人の決め事であったのに対し、良名仮名遣は、いろは歌を作った歌人本人の音韻認識を表わしている。それは次の三つの特徴から成る。

①最後の「上代特殊仮名遣」とされる甲類のコ(ko)と乙類のコ(kô)の混同。

②語頭の「エ」を「ア」行の「エ(e)」と、「語中」の「エ」を「ヤ」行の「エ(ye)」で表記する「エ」の仮名の二音分別。

③後続音に依存して起きる唇音系の撥音mと非唇音系の撥音n/ngの交替の認識。

良名仮名遣の消長は次の通りである。まず①の特徴は、有坂秀世^{ありさかひでよ}によると、九世紀末頃に成立した字典『新撰字鏡』^{しんせんじきやう}中の「コ」の分別を最後として二音の混同が進み、十世紀以降、一般的となった。

次に②の特徴は、小倉肇^{おぐらはらひじま}によると、十世紀前半頃に成立した源順^{みなもとのしたじう}の『和名類聚抄』^{しやう}や紀貫之^{きのつらゆき}の『土左日記』^{どざにじ}中の「エ」の用字法に典型的に表われており、天曆五年(九五二)に成立した石山寺の有名な『蘇悉地羯羅經略疏天曆点』^{そしつじからまよりくしよてんりやくけん}の中にもその用例が存在する。しかし天曆以降は二音の混同が進んで消滅した。

最後に③の特徴は、私の調査によると、延喜五年(九〇五)に成立した『古今和歌集』の中に、言語遊戯として典型的に表われており、前述の『土左日記』と『和名類聚抄』の中にもその用例が存在する。しかし鎌倉時代以降はm/n/ngの混同が進み、後続音からの影響で無意識のうちに撥音の唇音性が決定されるようになり、鎌倉時代前期に成立した歌書『後鳥羽院御口伝』^{ごとばいんごくでん}中の「紋紋↓もみもみ」の例を最後として、撥音の交替の認識は消滅した。